

# 知的障害児(者)の筆談援助法による表出言語に関する一考察 －「言いたいこと」のテキスト分析を通して－

## A Study on the Expressive Words of Children and Persons with Intellectual Disabilities by the Facilitated Communication

大塚 美奈子  
OTSUKA Minako

本研究では、23名の重度・中度知的障害児(者)が筆談援助法を通して語った「言いたいこと」における思考内容の共通点や対象児(者)自身の障害特性に関する内的捉えについて、計量テキスト分析を用い抽出語の結びつき及び文脈から検討した。共起ネットワーク分析から、【仲間の話を聞く】【自分のことを話す】【言葉を理解するお母さん】【知られていない本当の気持ち】【障害とともに人生を生きる意味】の5つのカテゴリー及びテーマが見出され、いずれのカテゴリーにおいても他の人への関心や思い(仲間意識)が語られている点、自身の障害を受け入れている点が共通して示された。

キーワード：知的障害 筆談援助法 (Facilitated Communication) 表出言語 障害特性

### I はじめに

知的障害とは、一般に同年齢の子どもと比べて「認知や言語などにかかわる知的機能」が著しく劣り、「他人との意思の交換、日常生活や社会生活、安全、仕事、余暇利用などについての適応能力」も不十分であるので、特別な支援や配慮が必要な状態とされている(文科省, 2013)。現在、知的障害の要因について医学的な見地からは、何らかの脳の機能不全によるものと考えられており、知能指数の度合い等によって重度、中度、軽度に分類される。コミュニケーションにおいても、表出言語が少なく、成人の知的障害を伴う自閉症者では約半数に有意義語の発話が見られないという報告がある(寺山, 1985)。小島・池田(2004)は、知的障害者の自己叙述から自己理解を測定した結果、知的障害者は、自己理解に関するすべての質問項目において回答することが健常者と比べて困難であったと述べている。健常者と比較するこれまでの知的障害児(者)のコミュニケーションに関する先行研究では、知的障害児(者)は、健常者と比べ語

彙数や品詞別語数が少なく、健常児と同レベルの表出言語によるコミュニケーションをとることは難しいため、(亀畑・大嶋, 1989)、個々の状態や理解のレベルに合ったコミュニケーションの方法や手段について検討することに焦点が当てられてきた。佐藤(2017)は、意志疎通が困難な者への障害種別ごとの支援手法について文献を調べ、文字よりもシンボルなどの表象記号の方が、意志表示が容易で、特別支援学校では、絵カード・写真カード・視覚シンボル・サインシステム・VOCA・トーキングエイド・タブレット等の利用があることを報告している。

しかし、近年、表出言語がほとんどなくても会話ができる重度自閉症者がいることが明らかになってきた。東田(2014)は、重度の自閉症者でありながら文字盤ポインティング(50音表の文字を指して会話をする方法)による会話やパソコンによる文章作成を行い、自閉症者の内面について多くの情報を提供し、作家として活動し、表出ができなくても、心の中に言葉を持っていると述べている。先行研究では他にもこの表出援助法・筆談援助法(Facilitated Communication以下FC)により重度の自閉症児の表出言語を可能にした事例がいくつかある(若林, 1983・落合, 1993・要田, 2009, 落合・小畑・井上, 2017)。これらのFCによる事例は、その状態像とFCを介して得られた言語表出や思考レベルの間にずれが生じている点で共通している。この点について、従来の言語能力と知的能力との相関関係から知的障害児(者)では高次脳機能である言葉を持つことが難しいと考えられ、FCを介した言語表出はファシリテーター(筆談援助者)の誘導ではないかと疑念を抱く見解もある(毛塚, 2004)。要田(2014)は、FCの利用による肯定的な側面は、当事者及び親が一樣に本人の生活の質が向上したことに言及している点であると述べている。このことは、保護者や当事者側からみてFCを用いることの利点があることを示している。柴田(2011・2013)は、障害を「表現することをめぐる障害」と捉え、重度の知的障害を含むあらゆる人に言葉を語る可能性があると考え、肢体不自由児にスイッチやスキャンワープロを用い、自閉症児に指筆談援助法〔障害児(者)の指を持って補助しながら自分の手のひらに文字を書かせてその文字を読み取る方法〕を用い、複数の知的障害児(者)の表出言語化を支援し、その過程を報告している。この方法により表出言語の少ない知的障害児(者)が、自身の思考内容や気持ちを外に語ることが可能となる事例が見られている。これまで、知的障害児(者)の「受容言語」についての研究(恵羅・伊賀・泉保, 2012)や前述のFCの手法に関する事例研究はあるが、FCによる「表出言語」の内容に着目し、複数の事例に共通する特徴を分析した研究はほとんど見られない。FCによる「表出言語」の内容について、知的障害児(者)の複数事例から当事者の障害に関わる情報や思考の共通点や傾向を探ることができれば、多くの知的障害児(者)に対する指導や支援に役立つことが考えられる。

本研究では、中度・重度知的障害児(者)がFCを通して語った「言いたいこと」の内容における共通点や自身の障害についての内的な捉えについて、計量テキスト分析法を用い、抽出語の結びつき及び文脈から探ることを目的とした。

## Ⅱ 方法

### 1. 対象

表1 対象者の概要

No	性別	年齢層	障害種別	表出言語レベル(有意味)
1	女	10	ASD	2語文
2	男	10	ASD	単語10以上
3	女	10	CP	単語2～3
4	女	10	CP	2語文
5	男	20	ID	単語4～5
6	男	20	ASD	単語5～6
7	男	20	ASD	なし
8	男	20	ID	単語10以上
9	女	20	Down	単語10以上
10	女	20	Down	2語文
11	女	20	ID	単語2～3
12	男	20	ID	2語文
13	女	20	ASD	単語10以上
14	女	20	Down	2語文
15	男	30	ASD	2語文
16	男	30	Down	単語5～6
17	男	30	ASD	単語10以上
18	女	30	Down	3語文
19	男	30	Down	単語5～6
20	男	40	ID	なし
21	男	40	ASD	なし
22	男	40	ID	単語2～3
23	男	40	ID	なし

診断名：ASD（自閉スペクトラム症）CP（脳性まひ）

Down（ダウン症）ID（知的障害）

対象は、20XX年7月（4名）、20XX+1年9月（6名）A県内B公民館会議室、20XX年12月（9名）、20XX+1年12月（4名）A県内C公民館会議室にて行われた指筆談学習会に参加した知的障害児(者)23名(男性14名, 女性9名)であった。参加者は、療育手帳AまたはBを所持しており、特別支援学校や特別支援学級・施設入所・通所等の中度・重度知的障害児(者)であった。自閉スペクトラム症(ASD)が8名で最も多く、知的障害(ID)が7名、ダウン症(Down)6名、脳性まひ(CP)が2名であった(表1)。

## 2. 手続き

(1) FC援助者：FCは、援助数200事例を越えFCに熟達している大学

教員1名が行った。他に特別支援学級教諭のスタッフ(録画記録者)1名と進行及び収録マイク担当(研究者)の3名で「言いたいこと」の記録を行った。

(2) FCによる表出化：会議室には当日FCによる援助を受ける全対象者とその家族が入室し着席した。待ち時間の間は、対象者は部屋の内外を自由に動くことができ、好きな活動をしながら待つようにした。援助者は、FCを行う対象者の利き手と反対側の横に座るようにした。対象者の名前を呼んで自己紹介の挨拶をし、援助者側にある手の人さし指を軽く持って文字を書くよう促し、数回書く練習をした後、「〇〇さん、お母さん(他の家族や支援者等の場合もある)に言いたいことがあったら話してください。」と声をかけ、援助者の手のひらに文字を書くように指示した(図1)。援助者は、対象者のわずかな指の動きを読み取り、読み取った文字を音声にて表出するようにした。体調や着席の状態により異なるが、1人の対象者に対する時間は10～15分程度とした。一度話し終えても続きがある場合は、他の対象者の話し終えた後で2回目を10分程度行うようにした。他の対象者の語った内容を聞いて伝えたいことが出てきた場合には、2回目で他の対象者と自由にやりとりできるようにした。



図1 筆談援助法

(3) 記録の信頼性：進行担当者は、保護者からの質問を援助者に取り次ぎ、表出された回答が本人しか知り得ない情報や正しい情報であると考えられる時は、援助者が音声にて語ったことに対し、進行担当者が「この内容でいいですか」と質問し、対象児(者)が頷く・援助者の顔を見る・保護者や介助者が「合っています」と答える様子から事実と一致していることを確認するようにした。対象者が自ら「終わります。」「代わります。」等の言葉を表出した時点で終了とし、語った内容を「言いたいこと」とした。

#### (4) 記録の分析方法

①テキストデータ化：ビデオカメラ（Panasonic HC-V360MS-W）により記録された録画の映像を再生し、対象者の「表出言語」を研究者と録画を担当した特別支援学級教員スタッフ1名の計2名で書き起こした。2名が各自同じ録画を素起こしで一字一句聞き取った通りに書き起こすようにした。2名の書き起こしの語句に相違がないか照合し、一致しない場合は再度2名で聞き取りを行った。その後、音声にて読み上げ、話し言葉として意味が通じるかを2名で確認し、意味不明の語句や文は除外した。書き起こし文から23名分のwordのドキュメントを作成した。Wordの文章校正機能を活用し、誤字がないか確認した。誤字該当箇所については表現を変えることなく修正した。23名分のWordのドキュメントをNo.1～23のテキストデータ化し、No.1～23全ての「伝えたいこと」をまとめた全テキストデータを作成した。普段は自らの考えを表出する機会が少ない対象者が、限られた時間で話したいこと・伝えたいことには何か共通性があるのではないかと考え、全テキストデータを作成した。

②語の共起関係の探索と文脈分析：テキストデータの分析には、KHCoder（樋口，2014）を使用し、全テキストデータより150語の頻出語彙を抽出し頻度表の作成を行った。抽出語を対象にサブグラフ法により抽出語の出現パターンの似通った語（共起の程度が強い語）を線で結んだ共起ネットワーク図を作成した。出現数による語の取捨選択に関しては最小出現数を20、描画数を110、Jaccardを0.2に設定した。ネットワーク図から共通して語られていると考えられるテーマや語について検討した。特に障害特性や内面に関わる情報部分については「言葉」「障害」「気持ち」「考える」等の知的障害の特性に関わると考えられるキーワードからKWICコンコーダンスを用いて該当すると考えられる文脈を抽出し、表を作成し内容を検討した。

### 3. 倫理的配慮

指筆談学習会に参加した対象者やその家族には、事前に書面にて調査研究の目的や方法、結果を論文で公表すること、研究への協力をしなくてもよいこと、途中で協力をやめてもよいことなどを説明し、同意を得た上で参加してもらうようにした。感覚過敏がある場合には、FCを短時間で行う、ペンと紙で行う、薄い手袋を着用するなどの対応や心身の不調の場合は、中断し次の機会にFCを行うなどが可能であることを伝えた。

## Ⅲ 結果

### 1. 語の分類

全テキストデータから出現頻度が多い順に抽出した150語を表2に示す。表2に示す語の内、比較的頻出回数が多い語を対象に、共起ネットワーク分析を行った。次に、図2にサブグラフ検出法により作成した全テキストデータにおける抽出語の共起ネットワーク図を示す。図2では強い共起関係ほど太い線で、出現数の多い語ほど大きな円で描画されていることから、抽出語間の関連性を確認した。解析の際には、最小出現数20、Jaccardを0.08に設定した。図2から、5つのカテゴリーの表出が見られた。カテゴリー①は、[変わる][仲間][話][聞く][お願い]

表2 出現頻度が多い150語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数				
人	199	お願い	25	人生	18	子ども	10	皆さん	8	自身	7
言う	182	職員	25	目	18	笑顔	10	学校	8	書ける	7
本当に	92	見える	24	感じ	17	信じる	10	間違う	8	正しい	7
お母さん	81	感じる	23	当たり前	17	親	10	頑張る	8	全然	7
生きる	62	大事	23	普通	17	世界	10	苦労	8	長い	7
言葉	57	伝わる	23	結構	16	表現	10	作る	8	痛い	7
気持ち	55	顔	22	出る	16	面白い	10	事件	8	底辺	7
障害	53	幸せ	22	深い	16	練習	10	心配	8	頭	7
自分	51	違う	21	認める	15	家	9	生活	8	両親	7
仲間	48	社会	21	言える	14	会う	9	他	8	簡単	6
分かる	47	字	20	書く	13	絵	9	替わる	8	叫ぶ	6
話	44	安心	19	存在	13	確か	9	暖かい	8	強い	6
伝える	43	多い	19	大丈夫	13	気づく	9	犯人	8	教える	6
心	41	大切	19	びっくり	12	起こる	9	夢	8	好き	6
聞く	40	表情	19	子	12	経験	9	欲しい	8	思い	6
考える	36	不思議	19	時代	12	嫌	9	話せる	8	思い出す	6
見る	32	変わる	19	声	12	傷つく	9	ビックリ	7	時々	6
話す	32	来る	19	全く	12	触る	9	意見	7	周り	6
手	31	やり方	18	美しい	12	生まれる	9	一つ	7	勝手	6
理解	31	意味	18	気が付く	11	増える	9	解決	7	場所	6
人間	29	覚える	18	胸	11	体	9	泣く	7	親ばか	6
知る	29	感謝	18	持つ	11	動き	9	兄さん	7	早い	6
悲しい	29	考え	18	難しい	11	動く	9	個性	7	特に	6
本当	27	施設	18	感動	10	本当は	9	最後	7	別に	6
世の中	26	少し	18	驚く	10	お父さん	8	詩	7	暴力	6

などの語の関連が認められた。図2に示した語の共起関係をもとに抽出語についてKHCoderのKWICコンコーダンスコマンドよりそれぞれの語がどのように用いられているのか文脈を探った。[話]と[聞く]の間に強いつながりが見られ「話を聞く」という文脈で使用されていた。表3に[仲間]の文脈を示した。「仲間の話」という意味での使用が認められたため「仲間の話を聞く」という方向で解釈し、カテゴリー①を【仲間の話を聞く】というテーマとした。カテゴリー②を見ると、[自分][悲しい][安心][話す][見える][来る]「覚える」などの語の関連が認められた。[自分]から[悲しい]へのつながりと[自分]から[安心][話す]へのつながりが見られた。表4に[自分]の使用された文脈を示した。「本当の自分の気持ちではないというのはとても悲しい」「ちょっと人をわざわざ遠ざけてしまう自分が悲しい」「意に反した言葉で人を遠ざける悲しい悲しい自分の障害」などの記述が見られ、「障害特性により自分が止むを得ず行ってしまう言動に対する悲しみ」と解釈した。[自分]から[安心]を介して[話す]へつながりが見られた。「安心して話す」という文脈が認められた。これらは、「自分のことを安心して話す」という意味が読み取れた。カテゴリー②を【自分のことを話す】というテーマとした。カテゴリー③では、[お母さん][言う][分かる][言葉][伝える][やり方]などの語の関連が認められた。[お母さん]から[言

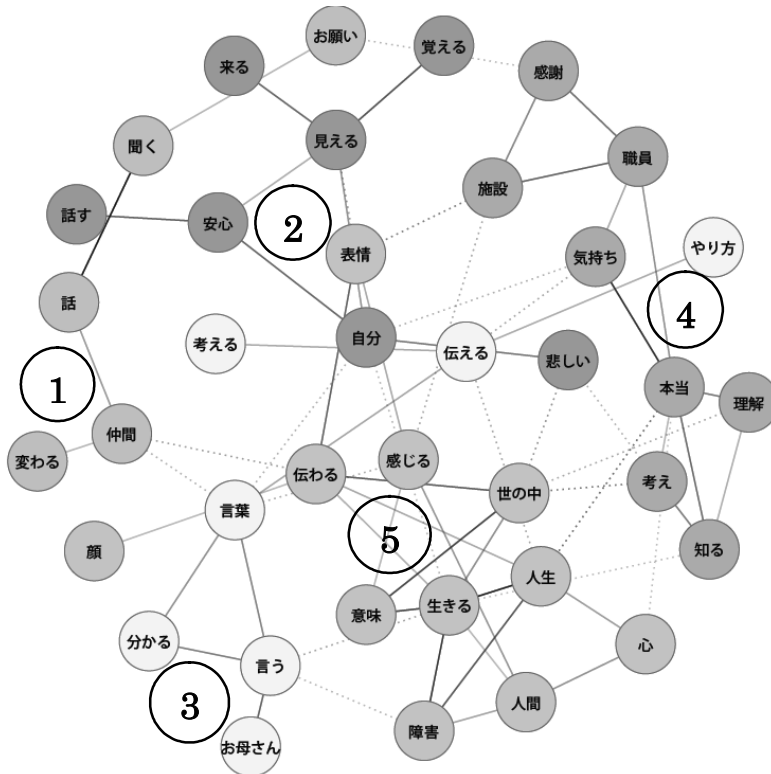


図2 FCによる「表出言語」共起ネットワーク図（全データ）

表3 【仲間】の文脈抽出（KWICコンコーダンスより一部抜粋）

一生懸命に言葉を覚えました。どうか世の中の常識を打ち砕いてすべての	仲間	たちにもこのことが伝わるようにしてほしいと思っています。地上での
けど、ぼくは見えない仲間が気になるので、大事にして欲しいです。が、見えない	仲間	とも話しています。このやり方ですがどうして見つけたのですか。
感じですが、ぼくは目の前で繰り広げられている出来事に、心をうばわれて、本当に	仲間	の声を聞きながら、ようやくぼくたちの時代が来たんだと感じていまし
のですが、ちゃんと合図が伝わったので、ホッとした。今日はたくさんの	仲間	の話が聞けたことがとても感動でしたが、私の向かいの2人は施設
いろいろな個性があるのは、それは当たり前ですね。でも、やっぱり	仲間	ならではの深い話が聞けてよかったです。私たちはやっぱり心の底から人
もいた方が楽しいから、今日はあんまり深い話にならないようですが、やっぱり	仲間	の話はとっても心にしみいる感じがあってありがたかったです。先生が私の時だけ
障がいのおかげでたくさんのいい人に出会ったというのは先輩の話や	仲間	の話からつくづくそれを感じました。やっぱり、障害があると大変なことも多い
をしたいと思います。僕が一番一番話し合えて感動したのは、みんなが	仲間	のことをたくさん話していたことです。多分、そういう風にみんな思っていると
のことだったのでなんだか考えることができてほっとしています。少しずつでも	仲間	の話をしているとなんだか仲間の中で苦しんでいる人のことがいくらかは
できてほっとしています。少しずつでも仲間の話をしているとなんだか	仲間	の中で苦しんでいる人のことがいくらかは解決するかもしれないと思い、どんどん
の中で苦しんでいる人のことがいくらかは解決するかもしれないと思い、どんどん	仲間	のことをみんなで話していけたらいいなと思っています。僕たちにとっては、

う]へつながり、[言葉]と[分かる]につながりが見られた。「お母さんはぼくの言葉を分かってくれている」という文脈での使用が見られた。カテゴリ③のテーマを【言葉を理解するお母さん】とした。カテゴリ④では、[気持ち][本当][知る][考え][職員][施設][感謝]などの語の関連が認められた。[本当]と[気持ち]の間に強いつながりが見られ、「本当の気持ち」という文脈での使用が多く見られた。[知る]はコンコーダンスの文脈から見ると「知らない」の意味で多く使用されていた。このことから「本当の気持ちを知らない」「本当の気持ちは知ら

表4 「自分」の文脈抽出 (KWICコンコーダンスより一部抜粋)

手が動くことで、先生の服の糸くず見たいのを取ったりするのも、 <b>自分</b> がやりたいからではなく、手が勝手に動くので、本当に悲しいけれど、それを書こうとしているからです。それから、口で話している言葉がなかなか本当の <b>自分</b> の気持ちではないというのは、とても悲しいことで、せっかくいい人と話をしてい
その言葉で、あっちへ行ってしまうので、ちょっと人をわざわざ遠ざけてしまう <b>自分</b> が悲しいと思うことがあります。これで少なくともお母さんにはわかってもらえたので、
ので、よろしくお願いします。意に反した言葉で人を遠ざけるという悲しい悲しい <b>自分</b> の障害に何度苦しめられてきたか分からないけれど、その事をどうか悲しい
応えるために自分を大事にしてください。つらいとき、暴言を吐いたり暴力をしても <b>自分</b> さえ大事にできていればくは大丈夫だと思うので安心して下さい。きっといつかの
のがよかった。まあ、我慢できる範囲です。大丈夫です。本当に悲しくなってしまう、 <b>自分</b> を心配する人がいるので悲しい。心配してくれる人に申し訳なかったり悲しくなっ
てよく怒っているのは、だいたい仲間に対するひどい言葉などを聞いた時などで、最近 <b>自分</b> のことで怒ることはほとんどないので安心して下さい。特に家で起こっているとき
とにかく、聞き役がいることが大事なのです。相談と言うのは、安心して <b>自分</b> で気持ちを話して、安心して自分が一番いいと思うものを選ぶことだと
いうことはそういうことです。実は、あのような犯人はまるでたくさんの方の考えを <b>自分</b> の体で具現化してあげたようなものなので本当に彼は悲しい人だなと思います

表5 「人生」の文脈抽出 (KWICコンコーダンスより一部抜粋)

やっぱり <b>人生</b> をしっかりといければいい顔ができる事がよく分かったので、
一人ひとりかけがえのない <b>人生</b> を生きていることがちゃんと世の中の人に伝わればもっともっといじめなんかせず
僕は重い障害とともにこの <b>人生</b> を生きてきたけれど一度も不幸だとは思ったことはありません
僕も当たり前 <b>人生</b> を生きていこうと思っているのでぜひお願いします
よりも障害が重いつて言われている人のきちんとした <b>人生</b> を生きていることをじっくり聞かせてもらっているのは僕はとても感動しています
みんなちゃんとした <b>人生</b> を生きているのがひしひしと伝わってくる気がします
天使のような心を持った人たちに会ってきただ <b>人生</b> はそんなに不幸ではありません。
薬を飲まされたりとかして本当の <b>人生</b> を生きられなくなってしまうこともあるので、そういう仲間のことを考えると
結構幸せな <b>人生</b> を生きているんだとわたしもうすうすう考えていたの
そういうことはやっぱり <b>人生</b> としては幸せな人生なのかもしれないと思っています
そうやって <b>人生</b> の幸せを味わってほしいと思います
僕としてはちっぽけかもしれませんがこんな <b>人生</b> でも本当にずっしりとした重みがある人生を生きているということを伝えてもらいたい
障害のある人はこの障がいのおかげで深い <b>人生</b> を歩んでいるということ伝えてほしいなと思います
本当の僕はとてもまじめでいるもので <b>人生</b> について思索を深めているのですが、

れていない」という方向で解釈した。〔施設〕〔職員〕〔感謝〕のつながりが見られ「施設職員への感謝の気持ち」と読み取れた。つながりの強さから判断し、カテゴリー④のテーマを【知られていない本当の気持ち】とした。カテゴリー⑤は、〔障害〕〔生きる〕〔人生〕〔意味〕〔世の中〕〔伝わる〕〔表情〕〔感じる〕〔人間〕〔心〕などの語の関連が認められた。〔障害〕〔生きる〕〔人生〕の間に強いつながりが見られた。表5に「人生」の文脈を示した。「一人ひとりがかけがえのない人生を生きていることが」「僕は重い障害とともにこの人生を生きてきたけれど」「僕も当たり前人生を生きていこうと思っている」「きちんとした人生を生きている」「結構幸せな人生を生きている」などの記述が認められ、「自分の人生を生きる」という意味での使用がされていた。これらの記述からは、個々の人生の捉えは異なるが人生に対する前向きな表現が見られた。〔生きる〕と〔意味〕は「生きる意味」という文脈で使用されていた。〔世の中〕と〔伝わる〕の間につながりが見られ、「世の中の人に伝わる」という文脈で使用されていた。表6「障害」の文脈から、「自分に障害がある」や「知的障害がある」「障害をしっかりと受け止めて」などの記述が見られた。これらの記述から「障害を受け止めて生きている」ことが読み取れた。〔障害〕〔人生〕〔生きる〕〔意味〕〔世の中〕〔伝わる〕のつながりから「障害とともに人生を生きている意味が世の中の人に伝わる」という方向で解釈し、カテゴリー⑤は、テーマを【障害とともに人生を生きる意味】とした。

## 2. 障害特性に関する内的情報

表7に「言葉」「仲間」「障害」「生きる」「人間」等の中心的な語のKWICコンコーダンスか

表6 「障害」の文脈抽出 (KWICコンコーダンスより一部抜粋)

自分に	障害	があるので一生懸命に字を覚えしました。
やっぱりどうしても知的	障害	というのが頭についてしまうので、みんなと特別な目でしか見ないけど
意に反した言葉で人を遠ざけるとい	障害	に何度苦められてきたか分からないけれど、
僕はずっと重い知的	障害	者として生きてきたので世間の人には生きていての意味さえ分からないのですが、
僕は重い	障害	とともにこの人生を生きてきたけれど一度も不幸だとは思ったことはありません。
私たちより障害が軽いところかあの子たちは間違っ	障害	てあると言われていてと思うのでとても胸が痛みます。
だって私はもうこの	障害	をしっかりと受け止めて生きているのに
だってほくよりも	障害	が重いつて言われている人のきちんとした人生を生きていることを
僕は知的	障害	の典型的な人なのでさっきの少年に伝えたいです。
仲間も含めてみんな	障害	があるということでは一段低く見られたり、場合によっては差別されたり、
私は見た目もすごく知的	障害	があるのがわかってしまうようなので冷たいまなざしと温かいまなざしの
私は	障害	があつて本当のことしか心に響かなくなつた人間なので、
やっぱり、	障害	があると大変なことも多いですが、
ぜひ、	障害	のある人はこの障がいのおかげで深い人生を歩んでいるということを伝えてほしい
障害がなければ気が付かないことが山ほどありますし、	障害	があつて苦労しているから、どうやって人が立ち直れるのかを知っている
少しだけ申し訳ないという気持ちもあります。僕のような	障害	がある子が生まれなかつたら、違つた幸せをきつとみつけていたのに
僕のおかげで幸せだとは言ってくれるからそれは安心してますが、やっぱり	障害	のない子供のいる家庭のお母さんたちは味合わせてあげたかつた気がするけど、
出生前の診断です。僕たちのような	障害	者に生きる場所がないかのような風潮は本当に悲しい風潮で
その人たちがまた新たに傷つくことになるので、僕たちのような	障害	のある人はそういう意味でつらい、僕たちは底辺ににいることに慣れている人間だから、
ほくたちにその役割はかせておきなさいというのが僕の意見です。だから、	障害	のある人がいなくなるようなことがあるとしたらきつともっともつと悲しい人が
のおかげで、変ないじめは起こらないということだと思うのですがそういう役割を	障害	児はちゃんと果たせるのだから、

表7 障害特性に関わる内的捉えの抽出

言葉に関する特性	
ほくたちは意識しているのと違う	言葉 が口から出てとても困っています。
「ばか」と言う口癖は、昔から強引に手を取られる経験が多かつたからです。どうしてもその	言葉 をいっぱい口にするようになってしまいました。
口で話している	言葉 がなかなか本当の自分の気持ちではないというのは、とても悲しいことで
せっかくだから人と話をしても、ほくの方から拒否するような	言葉 が出てしまうといひ人はみんな「今はじゃあ、ちょっとそつとしておかなくて…」
「本当はちがうよね」とよく聞いてくれるのですが、ほとんどの人はその	言葉 で、あつちへ行ってしまうので、ちょっと人をわざわざ遠ざけてしまう自分が悲しいと思う
なかなか意に反した	言葉 も出て、なかなか誤解を生むことも多くて、とてもつらかつたです
ちゃんとした気持ちが伝えられるなら、ほくたちももう、	言葉 の障がい者ではなくるので、何とかして理解されたいなあと思っています
意に反した	言葉 で人を遠ざけるという悲しい悲しい自分の障害に何度苦められてきたか分からない
先生がやることについてはほくは全て納得しているので、先生の言葉に否定的な	言葉 を言つても、それは関係ないの、それはよろしく願ひいます。
不思議な不思議な感覚ですが、	自分 ではなかなかうまく気持ちが言えないので
本当に当たり前にものを考えているのですが、なかなかそれが表現できないので、	自分 にできるのはこういう人を楽しくすることなので
私たちはいつも心の中で私にしか通じない	言葉 で美しい風景をこぼにしたりするからです。
行動に関する特性	
手が動くことで、先生の服の糸くず見たいのを取つたりするの、	自分 がやりたいからではなく、手が勝手に動くので、本当に悲しいけれど、
だんだんなんだかそれは許せないという気がしてきていかななくてはいいけないという	気持ち はあるのですが、そういう気持ちがあふれてしまうと体がもう動かなくなってしまうのです
仲間は夜嫌な事を思ひ出しては叫んでいます、いい職員さんほど、	自分 たちの責任ではないかと一生懸命聞いてくれるのですが、
名前を書けないのは手を	手 を使おうとしても力の調整が全然でず、小さな動きができないからです
上手に援助してもらえたら時々	手 が少し動くこともほくも分かりました。
暴力は結構もういいやと反抗するときに	出る だからがんばつて抑えているのですが、止めていても誰も気が付いてほめてくれないけど
腰のあたりが痛いからですが、泣くほど痛いのはあまりなくて痛くて	悲しく て泣いてしまいます。
でもいらすことも増えてきてよく怒っているのは、だいたい仲間に対するひどい	言葉 など聞いた時などで、最近自分のことで怒ることほほとんどない
特に家で怒っているときは、その日あった出来事が原因なので、こういうことは	言つて も仕方がないのですが、親は自分たちが何かしたかとすぐに反省し始めるのですが
一人でのいるのが好きというのか、けつこう	考え 事をする時間が増えてしまつて
その日あったことを一人	考え て何とかならないかと考えるのでけつこう難しい顔をしていることが多い。
どうしてこの子はそんなことがわかるのかしらと	言う ことでちょっとでもお母さんが悲しそうな顔をしていると私がすぐに気が付いて顔を覗き込み
仕事もそんなにいやでないし、だけど仲間に対する冷たい	言葉 が聞こえただけでも僕は壊くってしまうので、それで行かないことはあります。
僕が人を喜ばせられるのは、僕の才能ではあるけれども僕の喜ばせ方は、僕が何にも	考へて いないと思わせることで成り立っているの、結構つらいこともありました、

ら抽出した障害特性に関する内的な情報を示す。「言葉」に関する特徴について「意識しているのと違う言葉が口から出てとても困っています」「口で話している言葉がなかなか本当の自分の気持ちではない」「意に反した言葉が出て中々誤解を生むことも多くて」「気持ちとは別の否定的な言葉を言っている」「意に反して人を遠ざける言葉が出てしまったために」「どうしても



いやな言葉をいっぱい口にしてしまう」など自分の意図する言葉と違う言葉が出てしまう点が共通して記述されていた。行動に関する特性として「先生の服の糸くずみたいなのを取ったりするのも自分がやりたいからではなく、手が勝手に動くので」「名前を書けないのは手を使おうとしても力の調整が全然できず、小さな動きができないからです」など動きの調整がうまくいかない点についての記述が見られた。「その日あったことを一人で考えて何とかならないかと考えるので、結構難しい顔をしていることが多い」などの表情の動きに関する点、「仲間に対する冷たい言葉が聞こえただけでも僕は硬くなってしまうので、それで施設へ行かないことはあります」「暴力は結構もういいやと反抗するときに出る。だからがんばって抑えている」「仲間は夜嫌なことを思い出して叫んでいます」「ちょっとでもお母さんが悲しそうな顔をしていると私がすぐに気が付いて顔を覗き込みに行く」など自らの行動が他の人の影響を受けていることを示す内面な情報の記述が見られた。

## IV 考察

### 1. 「言いたいこと」の内容から見た共通点

本研究では、23名の重度知的障害児(者)がFCを通して語った「表出言語」の内容について、計量テキスト分析を用い、抽出語から思考内容の共通点や障害特性に関する自身の捉えを検討した。その結果、抽出語から【仲間の話を聞く】【自分のことを話す】【言葉を理解するお母さん】【知られていない本当の気持ち】【障害とともに人生を生きる意味】の5つのテーマが見出され、5つのテーマを通じた共通点は、「自分」のことだけでなく他の人への関心や思い・仲間意識が語られていること、自身の障害を受容していることであった。テーマ【仲間の話を聞く】では、障害があり、FCを通して話をしている人や施設や学校などで生活を共にしている人を明確に「仲間」と表現していることから「仲間意識」があることや障害を持つ仲間に関心を寄せていること、仲間の言葉を聞いたり、理解したりしていることが推察された。テーマ【自分のことを話す】では、FCを通して安心して自分のことを話せるという意味合いが推察される一方、日頃「自分」の意図しない言動で他人との関係が上手くいかない障害特性に対する悲しみを抱えていることが示唆される。テーマ【言葉を理解するお母さん】では、お母さんが自分の言葉を理解しているという意味合いが読み取れ、母親への関心や肯定的な思いが表現されていると推察される。田中（2001）は、物語内容を他者に伝達する課題において、知的障害者のメタコミュニケーションについて検討した結果、知的障害者の方が非知的障害者よりもメタコミュニケーションが機能していたことを報告しており、知的障害者が相手の理解状況を確認するための関心や行動を積極的に行うケースがあることが予測され、母親の気持ちや自分に対する行為を日頃から感じとっていることが「言いたいこと」における母親への思いを表現する内容につながったと考えられる。テーマ【知られていない本当の気持ち】では、他者が表面的に判断している「気持ち」とは別に「本当の気持ち」があること、他の人が自分たちの本当の気持ちを知らないと考えていることが推察される。若林（1973）が、「書字でのコミュニケーションが可能になった幼児自閉症例」の中で、日常は奇声を発し、跳びはねたり、人に無関心に見えたり

する対象が教師から「自分から何かをするようになりたいものだ。指令がないと動かないのはロボットだ」と言われ「ぼくはロボットではないですよ。生きています」と自筆したと報告していることから、他人に関心がないように見える場合でも外見からの判断とは違い、内面に他人への関心や思いを持っていることが考えられる。テーマ【障害と共に人生を生きる意味】では、人生に対する表現は多様だが、「障害」を受け止めている点で一致している。障害を受け止め、自分の人生を生きていること、そのことが世の中の人に伝わることを望んでいることが推察される。限られた時間の中での「言いたいこと」では、5つのカテゴリーの中に共通して他者への関心や思い、自身の障害の受容があることが示唆された。

## 2. 障害特性に関する内的な捉え

「障害」に関わる抽出語から特性に言及している記述を拾ったところ、自分の意図する言葉と違う言葉が出てしまう点が共通して記述されていた。東田（2013）は、「普通の子どものように言葉や態度で嬉しい気持ちを伝えられず、まるで嫌がっているかのように見えてしまうこともあります」と述べている。小笠原・守屋（2005）は、知的障害児の行動問題の実態に関するこれまでの調査を分析し、コミュニケーション手段として言語表出を主とする児童生徒は行動問題の出現が少ない傾向にあり、他者に自分の意図が正確に伝わらないことが行動問題の出現要因として示唆されているなど、行動問題はコミュニケーション様式と関係があることを指摘している。こうしたことから、知的障害児(者)は、表出言語が少ないだけでなく、本人の意図したことと違う言動が現れていることがあり、支援者や周囲の人が表面上から分かる情報で読み取りを行う場面も多く、結果「本当の気持ちや考え」とは違う対応をするため、さらに本人の意図と異なる結果を生んでいるケースがあることが推察される。今後は本人の考えに添った支援のあり方を考えることが必要と思われる。行動の特性に関しては、「手が勝手に動く」「力の調整が全くできない」など随意運動の困難さがあると考えられる。これは、脳機能の障害という捉えと一致する。東田（2013）は、「ぼくはうまく表現できないだけで、知的障害者にもみんなと同じような思いや感情はあると考えています」と述べている。対象者が語った障害特性や内面に関する表現の中に、フラッシュバックや感情のコントロールに言及する内容や意に反した言動がでることへの悲しみの記述が見られたが、これは、知的障害児(者)にも思いや感情があることを示しており、うまく表現できないが内面に思いや考えはあるという点で東田(2013)の見解と一致している。

## V 今後の課題

本研究は、山登（2017）が述べているように、うまく話せなくても心には言葉を持っているASD児(者)がいるということが、知的障害児(者)にも当てはまるという新たな可能性を示唆する点で意味あると考えられる。今回、知的障害児(者)23名の表出言語を一つのテキストデータとして分析し、FCによる「表出言語」の共通点や障害特性に関する内的情報を探る方法を試みたが、本来個人や障害種別によっても特性の違いがあるため、個人の「表出言語」をもとに支

援を行い、その効果を継続して段階的に記録することや事例数を上げて障害種別の特徴を検討することなどが必要と考えられる。FCの表出化を熟達した指筆談援助者1名で行ったが、より客観性を確保するために複数の援助者で行うことが考えられる。

## 引用文献

- 惠羅修吉・伊賀友里奈・泉保由布子（2012）知的障害のある生徒における受容言語能力と表出言語能力の関連－語彙レベルにおける予備的研究－．香川大学教育実践総合研究，24，111-118.
- 東田直樹（2013）あるがままに自閉症です，エスコアール出版部
- 東田直樹（2014）跳びはねる思考，イースト・プレス．
- 樋口耕一（2014）社会調査のための計量テキスト分析－内容分析の継承と発展を目指して－．ナカニシヤ出版．
- 亀畑義彦・大嶋謙一（1989）精神発達遅滞児童の語彙能力，北海道教育大学紀要，教育科学編，39，89-104
- 毛塚恵美子（2004）「Facilitated Communication－コミュニケーション支援か幻想か？－」発達障害研究，25（4），289-299.
- 小島道夫・池田由紀恵（2004）知的障害者の自己理解小島道夫・池田由紀恵（2004）知的障害者の自己理解に関する研究：自己叙述に基づく測定の試み．特殊教育学研究，42(3)，215-224.
- 工藤瑞香・大塚裕子・打浪（古賀）文子（2013）知的障がい者のコミュニケーション支援に向けたテキスト分析．言語処理学会，第19回年次大会発表論文集，280-283.
- 文部科学省（2013）教育支援資料 [www.mext.go.jp/component/a.../06.../1340247\\_08.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a.../06.../1340247_08.pdf) (2020年2月18日閲覧)
- 小笠原恵・守屋光輝（2005）知的障害児の問題行動に関する調査研究－知的障害養護学校教師への質問紙調査を通して－．発達障害研究，27，137-146.
- 佐藤洋子（2017）意志疎通が困難な者への障害種別ごとに求められる支援手法に関する文献レビュー，保健医療科学，66(5)，502-511.
- 柴田保之（2011）言語の生成に関する知的障害の新しいモデルの構築に向けて．國學院大學人間開発学研究，2，5-23.
- 柴田保之（2013）「自閉症」の新しい理解をめざして．國學院大學人間開発学研究，4，77-84.
- 田中真理（2001）：知的障害者の物語伝達場面におけるメタコミュニケーション．教育心理学研究，49，427-437
- 寺山千代子（1985）遅れを持つこどもの国語指導．日本文化科学社
- 落合俊郎（1993）．描画・書字における表出援助法の工夫について 国立特殊教育総合研究所紀

要, 20, 9-15

落合俊郎・小畑耕作・井上和久 (2017) . Facilitated Communication (FC) と表出援助法の比較研究 特別支援教育実践センター研究紀要, 15, 11-22.

要田洋江 (2009). 重度『知的障害』者と呼ばれる人々へのコミュニケーション支援に関する一考察 ―ファシリテッド・コミュニケーション利用者の『社会的障壁』― 生活科学研究誌, 7, 7-101.

要田洋江 (2014) 「知的障害」概念の脱構築 ―筆談援助法(FC)利用の社会的障壁と専門科学― 大阪市立大学「人権問題研究」14, 187-252.

若林慎一郎 (1973) . 書字によるコミュニケーションが可能となった幼児自閉症の一例 精神神経学雑誌 75(6), 339-357.

山登敬之 (2017) 喋れなくても言葉はある, わからなくても心はある―自閉症当事者とのコミュニケーション― 児童青年精神医学とその近接領域 58(4), 507-513.